

## ビバハウス便りNo. 55 春は満開、新しい年度への挑戦！

ビバハウス運営委員会 委員長 安達俊子

今年の冬は雪が少なく、雪解けが早かったので、春はいつもの年より早く訪れるものとはばかり思っていた。しかし、昼間は日差しが強く、汗ばむ日があると思うと、夜にはグリーンと寒くなったりで、ビバの庭先の春の花々も芽を膨らませ、花々を咲かす準備をしていたのに、咲く機会を捉えずにいた。2005年11月に上湧別町での講演会に招かれ、記念にと、チューリップで町おこしをしている主催者の方から送られたチューリップが咲いたのは、北星余市高入学式の日、4月9日だった。ビバから北星に入学した、宮城県から来たS君の入学を祝うように、赤い見事な花が春一番にビバの庭を飾ってくれた。

前号で触れた、2月の兵庫行きは本当に多くの貴重な体験の機会となった。「自分たちの子どものことは、他人に頼る前に先ず自分たちの手で」との思いで、過去何年もがんばってきたNPO法人『みやすの鐘』の皆さんは幾分疲れすぎていられるようにも感じられた。引きこもる子どもを持つ親御さんたちだけに、余りにも真面目すぎて、真剣すぎて、心に余裕と遊びが余りないような気がして心配だった。現在親の会の皆さんばかりでなく、自立支援施設の職員の皆さんの中にも、余りの過酷な任務に耐えられなくて『バーンアウト』（燃え尽き症候群）が発生しているとの話も聴くことがある。

自立支援にとって何よりも大切なことは、『持続する志を維持すること』。そのための精神と肉体をどのように保全させるかだ。実は、この事が私たちにとっても最も難しいことなのだ。夫か私のいずれかが、健康上重大な事態になれば、現在のままでは、即座にビバハウスを解散させざるを得ない。いわば毎日が綱渡りのような限界状態で、全国のほとんどの施設が運営されている。

『みやすの鐘』の皆さんには、是非今年の夏は、ビバハウス家族会の行事に合わせ、季節のよいときに北海道に遊びに来られることをお勧めした。子供さんのことで共通の話題がある二つの会の親同士が、行者にんにくのたっぷり入ったジンギスカンをつつきながら、ビールを酌み交わしている姿を想像しただけで、今から楽しくなる。さらに今年は、去年実現できなかった、姫路の若者たちにも、ぜひとも大雪の『ゆうすピア職セミナー』への参加を促したい。親たちや、日ごろの指導者ばかりでなく、もっと広い世界へ、若者たちを解き放ち、成長させる機会をもっともっと活用することもともに学びたい。

3月末には、ビバハウスのためにこの4年間全力を尽くしてくれた、森康彦さんを送り出した。森さんがいなくなったらビバはどうなるのですかとのこと心配も何人もの方々から頂いた。一番不安だったのは他ならぬ私たちだった。けれども、森さんにはもっと広い世界での経験もどうしてもこの年代でしてほしいとの願いもあった。断腸の思いでの退職同意であったことは事実だ。

「神は見捨てたまわず！」をまた今回もビバハウスは体験させていただいた。稚内の小学校で働いていた45歳の宮田路也さん、蘭越の中学教員だった37歳の島口信広さんが、ビバハウスをご自分たちの生きがいを作り出す場として選んでくださったのだから。